島木健作『再建』論

―宮井進一と梅川文男の視点から―

尾西康充

序

小熊秀雄は長篇叙事詩を試みた詩集『飛ぶ橇』を一九三五年六月に前奏社から出版した。同詩集「序」に「いま日本に叙事詩が生れなければならない現実的な環境と必然性とを考へ当分この長詩の形式を追求していきたい」と述べたように、満州移民や中国兵、農民兵、アイヌ民族の姿を叙事的に描き、満州事変以後も侵略の手を休めない日本社会を独自の長篇詩によって諷喩した。短詩型抒情詩の伝統を打ち破って詩人としての地位を確立した当時は、小熊にとって最も創作に脂の乗り切った時期であったといえ、翌年暮れには同じ北海道出身の作家島木健作をモチーフにした秀逸な詩を発表している。

島木健作へ

彼が娑婆で原稿を売り廻ってゐるときにも
まだ牢獄の中にゐるときのやうに
苦しんでゐる
宿命論者よ、
その良心を人々は買つた、
ジヤナリズムは歓迎したし
原稿は売れたさ
だが牢獄の追憶が尽きたとき
題材がプツリと切れたさ、
ゆらい読者といふものは
残酷なものさ、
君が宿命論を
卒業するのを内心喜ばないのだ
今度は君はほんとうに
娑婆にあつて
心の牢獄に入る番だ、

（「読売新聞」、一九三六年一二月一四日）

右の詩で小熊は島木に対して罵倒と呼ぶに近いほど痛烈な皮肉を浴びせている。島木がはじめて創作した小説は「癩」で、ナウカ社の「文学評論」創刊号（一九三四年四月）に同誌編集顧問の徳永直と森山啓の推薦によって掲載された。この小説は島木が思想犯として大阪刑務所に服役している間に肺結核を悪化させ、隔離病舎で非転向のハンセン病患者と出会った体験が作品の素材に使われている。かつては〝業病〟と呼ばれたハンセン病を発症しながらも不屈の意志を持って生き

ている思想犯の崇高な姿は読者の大きな反響を巻き起こし、島木は新進作家として一躍文壇の注目を浴びることになった。「獄」に加えて「盲目」「苦悶」「医者」「転落」という一連の獄中小説をまとめた第一創作集『獄』は一九三四年一〇月にナウカ社から出版された。いずれも転向と非転向をめぐる思想犯の心の葛藤が小説のテーマになっており、自己の苛酷な宿命に向き合う人間の良心が描かれていた。一九三六年一月に「文学界」同人に加わって活動の場を広げ、同誌に多くの小説を発表するだけでなく各種の座談会や合評会にも積極的に出席するようになると小熊は島木が出版ジャーナリズムに迎合して変節したと見て、右の詩で「今度は君はほんとうに／娑婆にあつて／心の牢獄に入る番だ」と諌めたのである。

当時島木は一九三六年七月まで彼にとってはじめての長編小説「再建」をナウカ社の「社会評論」に連載していた。全国有数の規模を誇っていた農民組合が壊滅的打撃を受けた香川県の組織再建をテーマにした「再建」は「社会評論」第一巻九号（一九三五年一一月）から第二巻七号（一九三六年七月）まで八回にわたって連載されるが、同誌廃刊によって一時中断される。島木は後の三分の二を書き下ろしで補足し、単行本として『再建』を一九三七年六月に中央公論社から出版する。彼によれば『再建』は「私の過去のすべてを打ち込んだ作品」で、表現に苦慮しながら原稿用紙一、一〇〇余枚をほとんど伏字なしで完成させた小説であった。[1] だが『再建』は発売後一〇日で発禁処分を受けてしまい、前年五月に思想犯保護観察法が施行されていたことも重なって、島木には「日常の行動の一挙一投足にもその法律を感じ、悪夢を見るやうな気持」を深めさせるできごとになった。[2]

ところで島木が「再建」を雑誌連載している頃のハガキが三重県松阪市で発見された。戦後松阪市長を三期一一年務めた梅川文男に宛てて送ったハガキで、梅川の生誕一〇〇年を迎える二〇〇六年四月、梅川の甥に当たる梅川紀彦氏が記念展の準備をしていたところ自宅の屋根裏部屋で見つけた。この貴重な発見を朝日新聞高津祐典記者が「作風転換期の心の中つづる／転向文学の作家・島木健作」という見出しにハガキ写真を付して大きく報じた（「朝日新聞」名古屋本社版、五月一日夕刊）。この直後、この記事は島木の故郷の北海道本社版（五月八日）に転載され、それを目にした北海道拓殖銀行の破産管財人原口佳記氏が、拓銀の古い職員録のなかに「給仕係」として「朝倉菊雄」（島木の本名）の名前があることを知らせた。原口氏からファックスで送信された「大正7年十二月廿日現在株式会社北海道拓殖銀行職員録」によれば、「給仕」として「朝倉菊雄　札幌区北三条西二丁目　島崎鉱業分析事務所方」とある。早速、昨年島木健作展を開催した神奈川近代文学館の藤野正学芸員に連絡し、遺族として展示に協力した保志伸子氏（島木の妻京の姉チヨの次女、調布市在住）に問い合わせてもらったところ、同事務所は母が事務を手伝い、兄八郎が養子に行った先であったことが分かった。

梅川に宛てた島木のハガキを発見した経緯はすでに拙稿「島木健作と堀坂山行―新資料島木健作（梅川文男宛）葉書三枚から―」（「三重大学日本語学文学」第一七号、二〇〇六年六月）で報告した。本稿ではそれに触れながら島木が「私の過去のすべてを打ち込んだ作品」と呼んだ『再建』を分析したい。

一

まず三・一五事件で検挙された島木がその後どのようなプロセスを経て裁判を受けたのかを確認しておきたい。島木は日本農民組合（日農）香川県連合会書記を務め日本共産党の党籍を持ち、一九二八年二月二〇日の普通選挙法にもとづく最初の総選挙では労働農民党委員長大山郁夫と同中央委員上山進を香川選挙区から擁立した。労働農民党は当時非合法であった日本共産党に最も近い合法政党で、左派の勢力が強かった日農も同党を支持していた。日農香川県連は全国有数二万の組合員を誇り、「委員長は絶対に落とされないから、最も確実性の高い香川に決した」という党中央の指示によって彼らの擁立を決めたが地元の農民の支持は得られず、激しい選挙干渉もあって両候補落選の憂き目を見た。島木は二月二二日、暴圧選挙批判演説会に赴くところ私服刑事に逮捕され、引き続き発生した三・一五事件に重なって治安維持法違反の容疑で起訴された。七月に高松刑務所から大阪刑務所に押送、大阪で検挙されたグループと一括審議され「春日庄次郎（外九八名）」として大阪地方裁判所で前沢幸次郎判事による予審がおこなわれた。一九二八年九月八日に予審が終結し起訴相当と判断され、翌二九年二月一日に懲役五年という一審判決を受ける。このときの大阪地方裁判所の判事は柴田貞輝、芹川定、喜田川元、検事は金子要人、吉村武夫、勝山内匠であった。つぎに一二月一二日に大阪控訴院で懲役三年という控訴審判決を受ける。大阪控訴院の判事は前沢幸次郎で、島木は「控訴審の公判廷にて転向を声明す」と「自撰年譜」に記している。翌三〇年四月一日に大審院への上告を取り下げて刑が確定する。[3]

島木が大阪刑務所に下獄したのはこの直後と考えられるが、宮井進一によれば「朝倉は、五年が三年に軽減され、しかも朝倉の控訴理由が成立したため、未決拘留期間の全部が控除されたから、体刑を受ける期間は実質一年何ヶ月かになった」という。[4] 宮井はさらに島木が一審判決後病気を理由に保釈されていたとも語っているので、検挙から一審までの未決拘留約一一ヶ月を差し引くと、病気を理由に一九三二年三月に仮釈放された島木は満期釈放の一九三二年五月の直前まで服役していたと考えることが可能だろう。他方、宮井は控訴審で懲役五年の実刑判決を受けて下獄、非転向のために未決拘留期間は通算されずに一九三四年一〇月の満期終了まで高松刑務所で服役した。

ところでこの宮井進一、彼は島木にとって農民解放運動の第一義の道を生きる「インテリゲンチャ出の運動家―典型的な、本当の意味の階級的英雄」で、島木の作品に描かれ続けた非転向の服役囚の精神的なモデルであった。[5] 早稲田大学商学部に在学中から建設者同盟に加わり、卒業後は日農香川県連合会に転じて書記を務めていた。島木が仙台での学業を捨てて香川に来るようになったのは、宮井が「中央に信念的な農村活動家を求め、その推薦を頼んでおいたから」であった。[6] 宮井は島木と共に日本共産党の党籍を得、一九二七年六月の土器村小作争議では検挙起訴され懲役一〇ヶ月の判決を受けた。続いて三・一五事件に遭い一九三四年一〇月まで高松刑務所で服役した。出獄した後は射場清香の故郷香川県大川郡で帰農したが、中央から地方に派遣

されたオルグがその土地に残ることは珍しく「県外から農民運動に書記として参加した人間のなかで、宮井のみが『土着』した」と評価されている。[7] 射場清香は『再建』の山田春乃のモデルとなった女性活動家で日農香川県連婦人部の結成に尽力し、宮井が投獄されると結婚を約束、助産婦の資格を取って夫の救援活動をおこないながら農民組合の旧幹部と連絡を取り合い、組織再建の準備を進めていた。宮井が出獄した後は結婚し、季節託児所を開いたり家庭教師をしたりするなど農民の生活を扶助した。香川県農民運動史の研究者横関至氏の調査によれば、「宮井による最初の農民組織化は、隣部落の小作人の小作料値上げ問題を取り上げて、二つの部落の小作人を結集した組織を一九三五年に結成したことである。地主側からの土地返還要求に対し、『年貢米』を売却した代金を銀行に預け利息で裁判費用を賄うこととし、裁判闘争にもちこんだ。この裁判は、翌年になって地主側が訴訟を取り下げたため、小作側の勝利となった」という。[8] この頃のことを宮井は木村信吉のペンネームを使って「香川農民の再建運動—雌伏七年壊滅から台頭へ」（「労働雑誌」第一巻七号、一九三五年一〇月）のなかで報告している。

運動に関心を持つ人々が、香川県のあらゆる階級的組織が壊滅したことをもつて、簡単に、絶滅したものと思つてゐたら、それは大衆そのものに対する認識不足であり、大衆の本質について知る所がなさ過ぎるのだ。読者諸君は既に、上に記した所でも判らうが、大衆は一度経験した事は絶対に忘却してゐるものでないことを。香川にあつた組合や×が××されたがためにこれ等の存在は痕跡もなく消えて行つた。しかし、それは文字通り姿を消したと云ふ丈の事であつた。

即ち二百数十の組合や党の支部の看板が村々から取り降ろされたと云ふ事実丈に過ぎなかつたのだ。一万五千の組合員大衆が、消えてなくなつたのではなかつたと云ふ余りにも明かな事を忘れてはならない。

だから年貢の軽減要求は作柄に依つて夥しい数に昇つたし、悪地主に対しては年貢を共同で不納したり、共同で売つて金に代えたりもした。一人の小作人の土地明渡事件に対して、部落の小作人全体が後楯となつて、共同の敵として地主に対抗した事実は沢山ある。そしてこんな個別的な争ひを続けてゐる間に、自然に共同の利害のために役立てる目的で自営的な基金がいろ〳〵の形でもつて出来上つて行つた。

このように宮井は香川県の農民組合再建の抱負を述べ、一九三五年の県議会議員選挙では農民代表の平野市太郎と大林千太郎を当選させた。宮井によれば大林は「全くの小作人であり、一束の大根、一籠の菜でも金に代えねばならないのであつて、丸亀市や坂出町を籠を担いで青物を呼び売する姿」を見かけるという人物であった。宮井は一九三六年二月二〇日の第一九回総選挙では前川正一を応援するが次点で惜敗、翌三七年四月三〇日の第二〇回総選挙では前川をトップ当選させ雪辱を果たした。いずれの選挙も農民から強い信頼を得ていた宮井夫婦による選挙活動が効を奏したのであり、農民代表を県議会に送ったことの意義は大きかった。組織再建に奔走していた当時の宮井が「朝

倉から、私の村や部落における生活記録を書いて送れと頼まれたのは、十年から十一年にかけての頃であったと思う。私が忙しくて書き渋っていると、何回も手紙で催促をよこした」と回想しているように、島木は帰農していた宮井に新たな生活を報告してもらうという手段をとった。(9)

二

島木が高松刑務所から仮釈放されて出所した翌年に当たる昭和八年、「自撰年譜」にはつぎのような記述がある。

昭和八年　意志的に自分を訓練することと、過去の自分の足跡について考へることとの両方の目的から、「日本農民運動史」を書かうとして、資料を集めにかかつた。

やや準備成つて、書きにかかつたが転向問題が根抵にあり、それにひつかかつて幾らも書きすすむことができなかつた。

ふたたび何等かの形で農民のなかで生活し、自ら行ふことによつて問題の解決の道を知るほか方法はないといふ思ひが強くなつて行つた。家の者に秘してその準備を進めつつあつた。

十二月、激烈な流行性感冒のために倒る。宿痾再発のけはひあり。ひそかに希望しつつあつた新しい生活もこれではおぼつかないと思ひ知つた。

病中多くの思ひあり。漸く起き上れるやうになるのを待つて、獄中生活中のある部分を小説風に綴るために机に向つた。

この部分には作家島木の出発を知るうえで最も重要な手がかりが隠されている。まず「意志的に自分を訓練すること」と「過去の自分の足跡について考へること」という二つの目的から「日本農民運動史」を書こうとするが「転向問題」が「根抵」にあって書き進めることができなかった。(10) つぎに「ふたたび何等かの形で農民のなかで生活」し「自ら行ふこと」によって「問題の解決の道」を知ろうとしたが「流行性感冒」のためにそれが果たせなかった。最後に病状が落ち着いて「獄中生活中のある部分」を小説に著しはじめた。これが作家島木の出発点となった「癩」であり、右の部分では創作に向かうまでの曲折が語られている。「日本農民運動史」の執筆を断念せざるをえなくなったのは島木の根底にあった「転向問題」のためで、病気が快方に向かうとすぐに、大阪刑務所の隔離病舎で非転向のハンセン病患者に出会った体験を小説にまとめたのは「転向問題」に一つの解決を与えるためであったとされる。しかしそれが島木にとって本当の解決にならなかったことは、『再建』が発禁処分を受けた際、依然として彼がつぎのような考えを持っていたことに示されている。

禁止処分を受けたといふことよりも、この作品の第二部で、主人公の出獄後の生活において、転向問題が、正面から取り上げられる筈であつたのに、その機を失つたことを残念に思つた。「再建」といふ題は、単に組織の再建といふより以上に、広く深い人間的な意味合ひをこめたつもりであつたが、書かれた部分にはそれはまだ出てゐなかつた。夏中蟄居し、新しい決意をもつて第二の長篇にとりかかつた。

右も同じ「自撰年譜」の昭和一二年の項からの引用である。島木によれば、『再建』第二部では「主人公の出獄後の生活」において「転向問題」を「正面」から取りあげる予定であったのに発禁処分を受けてしまい、「その機を失った」ことが「残念」に思われた。「再建」というタイトルには、「組織の再建」を意味する以上に「広く深い人間的な意味合い」を込めたつもりであったが「書かれた部分にはそれはまだ出てゐなかった」。そこで「夏中蟄居」し「新しい決意」をもって「第二の長篇」に取り組んだという。この「第二の長篇」とは、発表後に窪川鶴次郎や中野重治から厳しい批判を受けた『生活の探求』（一九三七年、河出書房）を指している。

このように「転向問題」は『生活の探求』に至るまで書きあぐねていたテーマであったことが分かるのだが、島木にとって「転向問題」とは何であったのか。控訴審で転向を表明したという自己の体験をふまえて小説でそれをどのように表現しようとしていたのか、その構想の内実を具体的に探る必要があると思われる。そこで取りあげたいのは「再建」連載中の島木が梅川文男に宛てたハガキで、表は黒色ペンで自書され裏は絵と文字が印刷されている。日農淡路連合会書記を務めていた梅川は三・一五事件で検挙起訴され、島木と同じ大阪刑務所で懲役五年を非転向で満期終了まで服役した。出獄後郷里松阪に戻って活動家を糾合し組織の再建に取り組んでいたところ、島木の「癩」が掲載された雑誌を偶然見つけ、「くいつく様によみながら、ぶるゝ興奮した」という。日農書記というかつての誼から再び島木と書簡を交わすような親密な間柄になり、作品評などを書き送っていたのだと思われる。一九三六年六月一六日の消印がある島木のハガキをつぎに紹介してみよう。

（表）

昭和一一年六月一六日　松阪市平生町　梅川文男様
東京市世田谷区世田谷弐の二、〇二四　16日　島木生

先日は御手紙ありがたう。いろいろ御批評感謝いたします。小生にとつては玄人の批評よりも素人の同志の批評の方がありがたくためになるやうです。古いところを書き切らないと新しいところが書けぬような気持でゐます。宮井君、香川でじつくり働いてゐるのでじつにじつに敬服してゐます。彼のことが書きたいと思つてゐます。

（裏）

「鞍馬道雨後」近藤浩一氏筆　日本美術院第十一回展覧会出品

島木によれば「玄人の批評」より「素人の同志の批評」の方がありがたくためになる。今の自分は「古いところ」を書き切らなければ「新しいところ」が書けないような気持ちでいる。[11]「宮井君」が「香川でじつくり働いてゐる」のに「じつにじつに敬服」しており、彼のことを「書きたい」と思っているという。この書面の内容は「自撰年譜」の昭和一二年の項のなかで、島木が『再建』第二部では「主人公の出獄後の生活」において「転向問題」を「正面」から取りあげる予定であると語っていたことに符合する。肺結核の再発を恐れて自ら帰農することのできなかった島木は、夫婦が協力して農村生活をはじめていた宮井に新たな生活の報告を求め、それを作品の素材に使って「転向

問題」を解決する糸口を見つけようとしていたのであった。

三

宮井清香は「記録」という雑誌に「ある農民運動家の生涯―回想・宮井進一」という連載をおこない、香川の農民運動に身を捧げた宮井夫婦の苦難の日々を回想している。刑期を終えて出獄した宮井は小作争議の指導の他に葉タバコ栽培の準備や野良仕事、春秋の農繁期に一週間ずつ季節託児所を開くなど根気強く農民組合の再建に取り組んでいた。この連載の第八回（一九八一年八月）には島木の「再建」に関する一九三七年当時の話題が登場する。それをつぎに紹介してみよう。

その年の六月に、朝倉氏から『再建』の単行本が送られてきた。最初のころ、『社会評論』に連載されていたものに書き足してまとめたものであった。その後、その本は発行十日目にして発禁になったという知らせがきた。その手紙には、今後の小説のテーマの方向も変えざるを得ないと書いてあったので、宮井の記録のほうはどうなるのかと心配になった。というのは、『再建』の場合はわたしの生活記録が中心であり、このあとに朝倉氏がとりあげる予定であった宮井出獄後の生活記録こそ重要な意義があると思っていたからである。

右によれば宮井夫婦も島木の当初の構想を支持し「宮井の記録」を素材にした「再建」続篇が書き継がれることを期待していた。しかし『再建』が発禁処分になったことで状況が大きく変化してしまう。島木は「今後の小説のテーマの方向も変えざるを得ない」と知らせてきたので、「宮井の記録」はどうなってしまうのかと心配になった。なぜなら彼らは「宮井の出獄後の生活記録」こそ「重要な意義」があると思っていたからである。宮井清香はその懸念を晴らすべく翌年正月に島木に会いに出かける。

翌一九三八年の正月に、わたしは朝倉氏に会いにいった。十二月三十一日の午後に出発して元旦の朝、わたしは鎌倉の朝倉氏の家についた。東京駅で落ち合うという打ち合わせであったのを、車掌に教えられて、大船で横須賀線に乗りかえようとした。ちょうどそのとき、朝倉氏に会った。「これから東京駅へいくつもりだった」といって、よろこんで迎えてくれた。そのとき朝倉氏の着物のひざのあたりがすりきれて綿がでていたのが印象に残っている。

また、当時彼が住んでいた家の二階に通じる階段のところに、マルクスの大きな肖像画がかざってあったことも、朝倉氏の心境を表わすものとうけとって、うれしい気もしたのだった。

彼は、「佐野、鍋山の声明をよんだか？」と笑いながらきいた。「読むには読んだが私には理解できない。あの大物がなぜあんなたわごとをいったのだろう」と答えると、朝倉氏は「やっぱり命が惜しかったのだろうな」といった。自分は命が惜しくて転向したのではない、ということを強調しているのだとわたしは受取った。それにしても、何年も前の声明のことを、なぜ今ごろになって話題にするのだろうと不思議におもった。

島木の家にマルクスの肖像画が飾られていたというのは、島木が当時思想犯保護観察の対象とされていたことを考えれば勇気のある行為

であり、思想としてのマルクス主義をまだ放棄していなかったことを表している。右に触れられている日本共産党中央委員佐野学・鍋山貞親の転向声明は『再建』後半の重要なテーマにされており、島木が当時相当それにこだわっていたことが分かる。『再建』（第三三章）で浅井信吉は教誨師乙竹から「美濃紙を相当部厚く綴った謄写版刷り」の冊子を渡される。「三十そこそこの若さ」で次席教誨師に任ぜられた乙竹は浄土真宗の他力信仰によって思想犯を善導する任務を精力的にこなしていた。浅井は中澤信、東條貫他一二名の名前が記されたその冊子を読んで、「（これはほんたうの事か？　今自分が読んだこれらすべてのことは。）と彼は自分に訊ねて見た。そして彼は又最後の頁を開いて見た。そこにならんでゐる二人の人間の名をあらためて見た。新たに彼の心を何か鉤の手のやうなものでかきまはすものがあつた」と感じている。『再建』では佐野・鍋山の転向声明は「この物語の今の時が三三年の夏であるといふだけで、日本の無産階級運動について多少の関心と知識とを持つてゐる読者ならば、浅井信吉が今教誨師の手を通して読まされた文書がどういふものであつたかを、作者の説明を待つ迄もなく推知することができるであらう」とほのめかされている。彼らの転向声明に対し浅井がどのような心境の変化を見せたのか、語り手は「この点の浅井がつひに曖昧なままに終らなければならぬのは、この物語の大きな欠陥である」と窮余の釈明をするだけで具体的にそれを描くことはなく、「転向問題」は解決されずに終わる。さらに宮井清香はつぎのように回想している。

彼は、『再建』が発刊一〇日で発禁になったにもかかわらず、他の一流作家の一年分くらいが売れたといってほくほくしていた。しかし、その作品の基礎となった生活記録を書き送ったわたしに対しては、一言の礼もいわなかった。わたしは訪問の主目的を話しはじめた。それは、自分の記録があまり変な方向で表現されるのはこまるという宮井の意見を伝えることであった。彼は、『再建』を上巻とし、宮井の記録をもとにし作品を下巻として大作にするつもりでいたが、情勢の変化によって、それはむつかしくなったというのみであった。その後の作品をどんなものにするかについて、彼は全然話さず、私もそれ以上きかなかった。ただ、『時勢』という作品のモデル問題について意見をきいた。というのは、前川氏が落選した前回の総選挙をめぐる動きを題材としたと思われる『時勢』という短篇小説について、早稲田の後輩の増山という人から、あの資料は君から出たらしいが、ちょっとひどすぎる書き方ではないか、との手紙をもらっていたので、その点についての朝倉氏の意見をきく必要があったのである。これ以前、手紙で問い合わせてもいた。そのときには、彼は「創作にネタはいらない。事実ない町をあるようにでもかける。小説のモデルが誰だといちいちせんさくしていては、きりがあるまい」という主旨の返事をよこしていた。それについて、再度きいてみたのである。そうすると彼は、前川氏の性格をしってりゃ、あのくらいな小説は百でもかけるが、君のところへ迷惑をかけるのならもう書かないことにする、といった。

「生活記録」を報告した宮井夫婦も『再建』の続篇がどのように執筆されるのかを気にしていたが、島木は「情勢の変化」によって執筆

が「むつかしくなった」というのみで「全然話さなかった」。宮井清香が島木に意見を求めた「時勢」という小説は「日本評論」（第一一巻五号、一九三六年五月）に発表され、単行本『第一義』（同年一一月）に収録された作品である。一九三六年二月二〇日の第一九回総選挙で前川正一が次点で惜敗したときのいきさつが描かれているのだが、島木は作品末に「附記」として「この小説にモデルはない。念のために断っておく。三六年三月」と記していたので、モデル問題は生じないと考えていたのであろう。「時勢」の主人公神田政治は農民組合の元活動家で総本部の役員を務めたこともあったが、小作争議の和解金のピン撥ねをしたり、亡父の遺産を狙って投獄中の同志の元妻と結婚したりするなど腹黒い人物であった。一度は組合活動から身を引くが新聞記者谷本の誘いにのって総選挙に出馬、対立候補の阪田代議士が選挙費用の大半を肩代わりし右翼のグループも彼のもとに面会に訪れる。神田が立候補することで農民組合の古い幹部杉本耕吉が立候補を断念するか、あるいは立候補したとしても組合の組織票が割れることを彼らは期待していたのである。選挙の結果は阪田が再選され神田は落選する。杉本は立候補を断念したのだが、彼を支持する組合員は神田に投票しなかったからである。このような記述には実在の前川とは異なる部分が多いので宮井清香が苦言を呈したのも十分に首肯できるが、島木が描きたかったのは、三・一五事件以前の無産主義運動が高揚していた時期に「中間派」として左派からも右派からも批判された人間が左翼陣営の壊滅後、押し出されるようにして運動の前面に立たされ、自己の身をどのように処するかについて考える暇も与えられないまま時勢に流されてゆく姿であった。神田は「彼の中間派とはほとんど性格的なもので、左に行くには臆病に過ぎ、右へ行くには図太さを欠いた、右顧左眄の結果であったにすぎぬ」と批判される人物で、この点では「全農内では中立的立場にあり、左右の政治的潮流のなかで『全農第一主義』を呼びかけて、政治的な指導力にはやや欠けるところがあった」とされる実在の前川に相通じる性格を持っていた。[19]また神田同様「中間派」とされた『再建』の谷川清吉も「つねに打算があり、谷川には卑俗な現実主義者であり、大衆追従主義者であり、果敢なやうに見える場合もつひに一個の小さな個人的な英雄主義者にすぎない」と批判されていた。神田や谷川は、満州事変から五・一五事件へと政党政治が没落し軍部ファシズムが台頭する時代、それまで中庸を旨としてきた人間が運動の前面に立たされ、あえなく敗北するという中間派の姿の象徴であった。

島木との再会について宮井清香の回想は続けられている。

私も子供もおいていったし、警察の目も考えて一泊して帰った。しかし、わざわざ宮井の意見を伝えにいったこの訪問も徒労におわった。すでに朝倉氏は宮井の意向と相反する転向の世界への道に、より深くはいりこんでいたのである。そのことを、その後間もなくして出版された『生活の探求』によって知らされたのであった。『生活の探求』は、時流にのって売れに売れて版を重ね、『続・生活の探求』もでた。宮井はそれに対し、「創作だから仕方ないだろう、彼も生活があるから」と寛大だったが、一方では裏切られたという感じももっていた。「ただ一つの

なぐさめは、貧苦の中を時間をさいて一年近く生活記録を書きおくったことに対して、一言の礼状もなくビタ一文も送られなかったことだ。おかげで、転向の片棒をかつがずにすみ、共犯者にならずにすんだよ」と言うのであった。

こうして朝倉氏は転向の度を深めつつ、どんどん稼いでいたが、一方の宮井には検挙がまっていた。

宮井清香は夫の意見を伝えに島木のもとを訪問したが「徒労におわった」。一般には好評であった『生活の探求』『続・生活の探求』に対して宮井進一は「寛大」な態度を見せながら同時に「裏切られたという感じ」を持っていた。「貧苦の中を時間をさいて一年近く生活記録を書きおくった」ことに島木からは「一言の礼状もなくビタ一文も送られなかった」。だが自分が島木の「転向の片棒」を担がず「共犯者」にならずに済んだことだけが「ただ一つのなぐさめ」であったという。宮井自身も別のところで、自分は「農民生活のすべてにおいて、目的意識をもって、行事にも、出来事にも、関与」していたので、「部落や村の行事や出来事などを、ありのままに書いてくれ」と注文してきた島木に対して不満を覚え、「農民を組織、啓蒙する何らかの戦略、戦術の意図」が含まれた「運動としての生活記録」でなければ記録する意味がないと感じていた。その後島木から謹呈された『再建』を「幾らか読んで見たが、私の感情に訴えるものが全くなく、頁が進まないまま放置してしまった」と回想している。[13] ちなみにこの後作家として活躍した島木に対して、宮井は一九三八年四月二一日、香川県人民戦線事件に連座して検挙される。[14]

四

帰農した宮井の生活記録を資料として使いながらも島木は資料提供者の意図とはちがう内容の小説を書き進めていた。『再建』の「あとがき」に「なほこの作品はこれだけではまだ作中の人物と事件のすべてに結末を与へてはゐない。私はさらに稿を改めて彼等のその後の運命を見て行くつもりである」と記されたように作者自身も作品が未完であることを熟知していた。出獄後の「転向問題」が小説でどのように表現されようとしていたのか、あくまでも推測の域を出ないのだがこの続編の方向を検討してみたい。『再建』（第三五章）には獄中の浅井信吉から山田春乃に宛てた手紙が七通紹介されている。内容から一九三三年後半に記された手紙と見られ、それらのなかで浅井は投獄前の自分の行動に関して自己批判を試みている。たとえば農民に分かりやすく平易に書こうとしすぎて農民組合の機関紙が「マンネリズム」に陥っていたこと、自分たちが支持する中央の政治新聞が誇張された嘘ばかり報道していたこと、地方によって土地所有の規模や小作慣行が異なるのに無知であったこと、小作人同士の争いや自作兼小作と地主兼自作の争いといった複雑な関係を理解していなかったことなどが自己批判の対象として挙げられている。浅井はそれらをふまえて「僕等は農民の生活のほんたうにいい相談相手、世話役でなければならないだらう。時には身の上相談の解答者でさへもなければならないだろう」と結論する。農民組合の組織再建のためには、階層分化が進み多様な顔を持っていた農民の姿を正しくとらえ、地方の情勢に疎い党中

央と適切な距離を取って自主的に行動する必要があった。浅井はある農民が「僕の背後から石を投げたことは事実だ。僕は決して彼等に石を投げられた事実に眼を覆うて行き過ぎやうとする者ではない。それをはじめて留置場で知つた時の深い悲しみと寂寞をゴマかそうとするものではない」と自戒する。地元の意向に反して中央から大山郁夫・上村進を招いて立候補させた総選挙の敗北は島木の脳裡から離れることはなく、離反した農民の冷ややかな「あの眼なざしほどに今の杉村をぶちのめすものはない」とそのときの体験を小説で描いたこともあった（「一過程」、「中央公論」、一九三五年六月）。

浅井は獄中生活で内省を深めていたところ一九三四年一二月二三日の皇太子御降誕の恩赦によって一三一日減刑となったことが知らされる。受刑者の新聞「人」第三九〇号が配布され、「高千穂の霊峰に寄せて」や「恩赦の優詔を拝して」などの記事を読む。行刑局長の「謹話」には「治安維持法に違反した受刑者も亦今回の恩典に浴してゐること」を強調した一節があり、浅井はそれを読んで「深く彼の肝に銘じたのであつた」。

現在この種受刑者の大多数は、唯年少客気の逝る所、一時の流行思想に感染して思はず邪路に迷ひ込んだといふ程度のもので、必ずしも本心から不逞の考へを有つてゐたものでないといふことが、その後転向者の続出したといふ事実を見ても明白であるし、又極く少数の者は、或は一時的に、又多少は信念的に、不逞の考へを抱いてゐたかも知れませぬが、しかしそれとても受刑中に漸次日本人意識に醒めて行き、従つて国体に関する本来の正しき観念をも取戻し得たかのやうに見受けられまするので（中略）特に有赦の御敬沢を垂れさせられたものと拝察いたさるるのであります。何卒それ等の人々は（中略）忠良なる国民としての自己をはつきり見直し、従来の迷夢妄想から全然擺脱し去ることに努力しなければならぬと思ふのであります。

小説には「原文のまま」という注記がなされて右のように引用され、「まことに浅井も亦、かの岡生と共に、転感無量なものがあるのであった」と記される。「岡生」は受刑者の新聞「人」の常連執筆者のようで、同号には「高千穂の霊峰に寄せて」を寄稿しており、浅井には彼と共に「転感無量なもの」があったとされる。現在原資料を確かめることはできないが、なぜ島木はあえて「原文のまま」という注記をおこなってこのような長文を引用したのだろうか。佐野・鍋山の転向声明に関しては相当なこだわりを持っていたにもかかわらず「作者はこの文書の主張してゐる政治的意見に対して作者自身の積極的な見解といふものは別にもつてはゐない」と空とぼけていたのとは対照的である。

宮井夫婦の回想から明らかなように、島木は宮井が実際に歩んだ左翼の路線を小説で再現するのは難しいと考えていた。「再建」では中間派と呼ばれた谷川清吉がファシズムを主張する農民興国会に加わって、押し出されるようにして運動の前面に立たされる。獄中の浅井は谷川の持つ「あるポテンシャルな力」を信じており、続篇では組織再建のために彼に協力を求めることが推測されるが、実際には孤立していた谷川も検挙され権力の前に敗北を喫している。あるいはまた島木が宮井の記録を素材に使って創作した「時勢」でも、中間派の神田が

独断に陥って選挙に落ち農民組合の陣営を敗北に導いていた。「時勢」の結末の部分では、二・二六事件直後の騒然とした空気の下で神田は無産派代議士を「やれファッショと闘ふの、死を覚悟してるのといつてた連中が議会でどんなことをいつたり、したりするかねえ」、「ファッショと手をつなぐなんざア朝飯前のことさ、――時勢が変つたんだヨ、とね」と辛辣に批判している。

こゝ数日間、鬱結(ママ)してゐたものを一時に吐きだして了つたやうで、神田は愉快であつた。明日あたり、かつて自分をおとづれた某右翼団体の幹部を訪ねて見よう、と、彼は何かしらそこに一道の光りを見るやうな気持で思ふのであつたが、明日、その団体の事務所の看板が取り外されてゐるのを見、そこにたむろしてゐた人間たちが［一〇文字分伏字］聞かされた時は、彼はまた時勢に応じた新たな考慮を廻らすことだらう。

内容から推測して伏字の部分は右翼団体が弾圧されグループが解散させられたことが書かれていたのだろう。中間派に対する弾圧の後には右翼に対する弾圧が待ち受けていたのであり、治安当局による仮借のない統制がおこなわれた。転向左翼が大政翼賛会の中心になったことはよく知られているが、それは一九四〇年の近衛文麿を中心とした新体制運動をまたなければならない。出獄後も自己の信念を貫いた宮井とちがって、浅井は転向するといってもどこに向かって進めばよいのか、当時の情勢を考えればその道筋を考えることは決して容易なことではない。

香川県農民運動史を執筆した羽原正一氏によれば、島木は日農書記時代に過労がたたって二度喀血して倒れた。当時「農民が肺病を怖れる事、死を怖れる事と同じ」で「彼が喀血したということが知れると、日ごろ深い世話になり、義理にでも顔を出さねばならない人でも、あまり顔をみせず、毎日、学習にきていた若い青年たちも止絶えて見舞う者も、訪れるものも少なかった」。しかし「三木という前科数犯といわれている組合員で貧農の老人」が島木を「自分の息子のように優しく介抱した」という。[15] 島木は差別の眼差しにさらされ全くの孤独におかれた状態で彼に手を差し伸べてくれた「貧農の老人」の愛情を感じたであろう。羽原は『農民運動に仆れし人々』（一九六三年、私家版）のなかで、島木は三・一五事件当時自分が処理し忘れた文書が原因で同志が一斉検挙されたのではないかと自己を呵責し続けていたことをふまえて、「後年、良心作家とよばれた彼は、もちろん、闘士として、まれにみる良心家であった」という。そして「初めて中央公論に、懸賞小説が当選して、作家としての第一歩をふみだしたとき、彼は私に長い書面をくれた。それは、農民組合の実践から離れてゆく淋しさと、やむをえない立場を、切々としたためた名文であった」という秘話を明かしている。羽原は島木を「良心家」と呼んでいるが、これは島木が資料提供者の宮井夫婦に対して不誠実ともとれる態度をとっていたこととは対照的である。

島木は農民運動の現場にいた人間として運動の課題に「文学的解決」を与えようとした。「玄人の批評」においては「文学以前の問題」といわれるようなものであっても「作者自身の農民運動にたいする考へ方をまで鋭く突いてくる」ような「素人の批評」に対しては誠実に対

処しようとしていた（「読者の批評について」、「文学案内」、一九三五年八月）。これは「文学外の態度がそのまゝ文学内の態度になつてゐる」と窪川鶴次郎から批判される点でもあったが、島木は運動の課題に「文学的解決」を与えようと彼なりに懸命であったのであり、そのためにはたとえ宮井夫婦の不信を買おうとも納得のゆく描き方を模索していたのだと思われる。しかし左翼はもとより中間、右翼の路線まで弾圧の危険にさらされ断念せざるを得ない立場に追い込まれたとき、そこに残されたのは〝誠実であろうとする態度〟だけで、島木は『再建』第二部の構想を転回させて『生活の探求』を創作した。[16]『生活の探求』を批判した窪川鶴次郎は「島木氏の人に対する態度」に問題があるとし、「彼と読者との関係、即ち彼が己の文学と読者とをいかに結びつけてゐるか、結びつけようとしてゐるかを見る」ことが重要だと訴えた。[17]窪川によれば島木は「知識階級の現状」に対する批判を容赦なくおこなう反面、彼が描いた主人公杉野駿介の農村生活は「作者の抽象的な観念による生活の設計があるのみ」であった。「対象の批判においては極めて痛烈でありながら、主体としてその対象と関連し合ふところでは突如として、或は謙譲であり、或は感傷的である」という『生活の探求』の「欺瞞」は、島木の「己の建前や心構へについてひたすら読者の理解や諒解を求めようとするはげしい意識」によって読者が「屈服」させられたことによって生じたもので、「島木氏の誠実や真摯」な態度は眉唾物だという。[18]

また中野重治も同作品を「あまりにも不満が多くてまとめて書くことができない」といい、「どうにも私には『生活の探求』において作者の何かを探求する眼が感じられない」として「探求の不徹底」を痛罵した。[19]彼らが島木の〝誠実であろうとする態度〟に胡散臭さを感じていたのは、それが何に対して誠実であろうとするのかという本質的な思考を停止させて成り立っており、「虚溝橋事件以後に支配的になった「粛然として〈時局〉に応じる」といった類の戦時下の言説と通底するものだったからである。島木が〝誠実〟を強調すればするほど、強制されるのではなく〝誠実〟に戦時動員に参加するという同時代の主体の言説と共鳴し、読者の思考停止に拍車をかける結果をもたらした。[20]

さらに中野によれば、島木が稚拙な観念を弥縫しながら創作した『生活の探求』は「字引片手に小説を書くことの所詮駄目だということの証明」だとし、「現実の現象面から取りだされてほしいままに仮想せられた一青年と、同じく現実の現象面から作者の断片的知識によつて引きだされた今日の農村とを、作者が大した度胸で腹合わせにして縛りつけたもの」であったという。[21]これは「農民を組織、啓蒙する何らかの戦略、戦術の意図」が農村生活の細部にまで浸透していると考えていた宮井が、「部落や村の行事や出来事などを、ありのままに書いてくれ」と注文してきた島木に対して不満を覚えていたことに符合する。政治は言説として日常のあらゆる言動をとらえ続けているのであり、一切の思想を脱落させて農村の生活をありのままに描写しようとした『生活の探求』は、観念で拵えた現実の模造品でしかなかった。このような島木の詐術に宮井や窪川、中野は気付いていたのであり、島木の〝誠実であろうとする態度〟を「なんだか汚い」と唾棄した中

野は同時代作家として島木の密かな転回を見逃さない嗅覚を持っていたのである。

注

(1) 高橋春雄作製「島木健作年譜」(『日本現代文学全集』第八〇巻、一九六二年一〇月、講談社)および「自作年譜」(『新日本文学全集』第一九巻、一九四二年、改造社)

(2) 「仕事のことその他」(「文学界」、一九三六年八月)

(3) 『昭和思想統制史資料　別巻(上)』(一九八一年一二月、生活社)

(4) 宮井進一「島木健作と私　党および農民運動を背景として」(「現代文学」第四号、一九六六年四月、一三頁)

(5) 「文学界」同人座談会(一九三六年二月、一五三頁)

(6) 前掲(4)と同じ。

(7) 横関至『近代農民運動と政党政治—農民運動先覚地香川県の分析—』(一九九九年六月、御茶の水書房、二五七頁)

(8) 同右

(9) 前掲(4)と同じ。

(10) 小笠原克「第一義の道—島木健作と中野重治—」(「文学」、一九六五年七月)によれば「農民大衆からの孤絶感——帰農土着、党方針への批判——日本農民運動史、そして、組織壊滅後も宮井進一を媒体として持続する連帯感的希求を、転向問題追求の主体的位相たらしむべく〝文学〟は、必然的に前二者を契機として内在化させつつ、組織批判と個人的弱さの問題という矛盾する二つのモチーフを、いかに高次元につなぎとめうるかを主題としてゆくのである」と指摘される。

(11) 島木が玄人の批評より素人の同志の批評の方がありがたくためになると感じているのは、つぎの一節からも分かる。

「僕はプロレタリア陣営にあるので、真面目な労働者・農民から時々手紙を貰ひます。さういふ人のものの見方・作品の批評が文壇に於ける批評とまるでちがふのですがね。文壇人の批評は要するに形象化が足りないとか、或る人物がよく描けているとか描けていないとか、まあさういふ批評が多い訳ですね。読者は生活人だから作品の中の文学以前といふやうなものを直接問題にして来るのです」(座談会「新文学のために」、「行動」一九三五年八月)

(12) 『日本社会運動人名辞典』(一九七九年三月、青木書店、五四三頁)

(13) 前掲(4)と同じ。

(14) 大久保典夫「ある転向作家の肖像　島木健作『再建』をめぐって」(「批評」第一一号、一九六一年六月)には「憶測すれば、宮井が香川に合法的に生活していることで、島木は、自己の運動批判にともなう倫理的負い目を払拭し、革命運動の批判の観点を定立しえたのである」と指摘される。出獄後の宮井は合法舞台を重視しながらも実際には度々検挙されている。磯田光一『比較転向論序説　ロマン主義の精神形態』(一九七四年五月、勁草書房)には「『再建』の主人公のモデル・宮井進一の帰農後の生活が、実質的には『生活の探求』の杉野駿介の生活と大差ないと見る大久保の見解は正しいと見なければならぬ」とあるが、宮井進一からすると『生活の探求』はいうまでもなく『再建』でさえ自分とはちがう人物が描かれていると感じていた。

(15) 羽原正一『農民運動に仆れし人々』(一九六三年、私家版、一二六頁)

(16) 平野謙「島木健作」(『現代日本文学大系』第七〇巻、一九五〇年二月、筑摩書房)には「私は『再建』から『生活の探求』への転身を、ひとつの屈伏と眺め、ひとつねじまげと認めるものである」と指摘される。他方磯田は前掲書で「私としてむしろ『再建』と『生活の探求』との連続性にこそ注目したいのである。それは一貫した大衆追随主義をひとつの倫理とまで化した歩み」であったと指摘する。

(17) 窪川鶴次郎「島木健作論」(「文芸」、一九三八年一〇月)

(18) 窪川鶴次郎「続・島木健作論」(「文芸」、一九三八年一一月)

(19) 中野重治「探求の不徹底」(「帝国大学新聞」第六九三号、一九三七年一一月)

(20) 前掲(13)には「島木の後退は、戦時体制の深化による大衆路線の編成替えと歩調を一にしているのであり、それが誠実さと善意のもとになされているだけに、島木文学のもつデマゴギー的性格は許しがたいものとなるであろう」とある。

(21) 中野重治『島木健作氏に答え』(「文芸」、一九三八年二月) に書かれたが検閲のために未発表。『政治と文学』(一九五二年六月、東方社) に発表された。

(おにし　やすみつ　三重大学人文学部助教授)